

第27回 郷土先賢室顕彰者紹介



国際的な感覚を備えた芥川賞作家

ほった よしえ
堀田 善衛 (1918~1998)

善衛は、射水郡伏木町(現高岡市)で廻船問屋を営む堀田勝文、くにの三男として生まれた。昭和6年(1931)3月、善衛は伏木尋常小学校を卒業後、石川県立金沢第二中学校に入学した。当時の伏木港が日本海側の主要国際港であったこと、幼少時に父 勝文が定期購読していたロンドン・タイムズなどが身近にあったこと、中学三年時の下宿先である宣教師宅で英語のみの生活を送ったことなどにより、善衛の国際的な感覚が幼少時から養われてきたことが窺われる。

昭和14年(1939)4月、善衛は慶應義塾大学法学部政治学科に入学した。大学受験のために上京したとき、善衛は二・二六事件に遭遇した。この時のことについて、「生家が没落したという経験とも重なって、国家もまた永久不変ではなく、軍隊の反乱などによって崩壊することもあるのだという、中世の無常観ともつながる感覚を与えられた」と、回想している。善衛は、転科した文学部仏文科を昭和17年(1942)9月に卒業した。大学時代、伊集院清三との出会いをきっかけに『批評』の同人となり、詩を書き活躍するとともに、河上徹太郎、小林秀雄、中村光夫等を知った。

昭和20年(1945)3月、善衛は上海で終戦を迎え、その後中国国民党中央宣伝部に徴用された。この頃、武田泰淳、石上玄一郎、草野心平を知り、詩誌『歷程』の同人となる。中国での体験は、善衛の生き方に影響を与え、後にそこから多くの作品が生み出されることとなった。

昭和22年(1947)1月に帰国した善衛は、昭和26年(1951)まで多数の作品を発表した。特に、昭和26年(1951)8月に「廣場の孤獨」(前編)を、9月に「廣場の孤獨」(全)、「漢奸」を発表し、これらの作品は、同年度下半期の芥川賞を受賞した。そして、昭和28年(1953)、国際的な舞台における「組織と人間」を追求してきた善衛の文学の集大成となった「時間」を発表する。

昭和52年(1977)5月、善衛はスペインへ移住し、昭和62年(1987)12月までの約11年間スペインに滞在した。この間、画家ゴヤの長編伝記「ゴヤ」四部作を完成させ、第4回大佛次郎賞を受賞する。昭和54年(1979)3月、スペイン政府より、賢王アルフォンソ十世十字勲章を授与され、6月にはアジア・アフリカ作家会議における活動の功績で、ロータス賞を受賞した。平成6年(1994)、これまでの功績により、高岡名誉市民となる。平成7年(1995)には長年の文学的業績により朝日賞を受賞し、平成10年(1998)3月、日本藝術院賞を受賞した。9月5日、脳梗塞により死去。享年80歳。

専門員 松本 純

平成29年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



「小麦農林10号」を開発し、世界を食料危機から救った農学者

稲塚 権次郎 (1897~1988)

明治30年(1897)、東砺波郡蓑谷村西明(現南砺市西明)に生まれた。
ダーウィンの「進化論」で遺伝や品種改良に興味をもち、大正4年(1915)、東京帝国大学農科大学(現東京大学農学部)に入学し、蚕の遺伝の研究に励んだ。卒業後は農商務省に入省し、大正9年(1920)、農事試験場陸羽支場(現秋田県大仙市大曲)に赴任し、水稲の品種改良に取り組み、成果を挙げた。大正15年(1926)からは、岩手県農事試験場において、小麦の品種改良に取り組み、昭和13年(1938)までに8種類の新品種を作出した。その中で昭和10年(1935)に登録されたのが「小麦農林10号(Norin10)」である。戦後、この種子がメキシコで小麦の研究をしていたN・E・ボーローグ博士の手に渡り、メキシコの小麦との交配により、従来の2~3倍の収量も可能となる品種が幾種類も作出された。これらが数多くの国々に広がり、それぞれの国土に適した品種が作出された。この成果は1960年代に広がった「緑の革命」の一翼を担い、世界の多くの人々を飢餓から救うこととなった。

専門員 松田 啓宏